

若山牧水全集

第三卷

若山牧水全集

第三卷

雄鷄社刊

若山牧水全集 第三卷

昭和三十三年七月三十日發行

著者若山牧水發行者武内俊三印刷
者草刈親雄印刷製本所東京都新宿
區市ヶ谷臺町一番地中央製本印刷
株式會社發行所東京都中央區日本
橋江戸橋一丁目七番地株式會社雄
鷄社電話千代田⁽²⁷⁾二七九一、二番
振替東京二六二五五番

定價六〇〇圓

編集・校訂

若山喜志子
大悟法利雄

落丁、亂丁の際は取換えいたします。

目次

牧水歌話

第一編 和歌評釋

尾上柴舟氏の歌……………七

與謝野晶子女史の歌……………一八

前田夕暮氏の歌……………三五

自歌自釋……………四二

評釋補遺……………六四

第二編 歌集を讀む

『相聞』を読む……………	七二
『酒ほがひ』を読む……………	七九
『朝夕』を読む……………	八五
『收穫』合評のうちに……………	八六

第三編 秀歌をおもふ心

さうですか歌……………	九三
一首一句の解剖……………	九五
人いろいろの缺點……………	一〇三
無題 三四……………	一二
無名の詩人……………	二四

第四編 感想斷片

縦の木蔭より(一).....	一三
縦の木蔭より(二).....	一四
裾野より.....	一八
林中の温泉より.....	一五
技巧私見.....	一六
雨夜座談.....	一六
編輯後記.....	一七

和歌講話

歌話と批評と添削

座談 二三……………一八三

萬葉短歌全集……………一八六

石川啄木君の『悲しき玩具』……………一九一

前田夕暮君の『陰影』……………一九七

添削と批評……………二〇一

和歌評釋

『雲母集』の歌……………二七

『桐の花』の歌……………三三

『啄木歌集』の歌……………三七

『佇みて』の歌……………三四

『森林』の歌……………三六

年少作家の歌……………三八

『與謝野晶子集』の歌……………三九

私の歌の出来た時

春の歌……………二九

夏の歌……………二七

秋の歌……………二四

冬の歌……………二二

批評と添刪

歌についての感想

生命の欲求力その他	三二
夜　　話	三五
青葉の窓より	三三
桐の葉の蔭	三六
虫を聴きつつ	三八
ひとり言	三三
いろいろの歌と人	三七
或る二人の詠草	三七

加藤東籬集を讀む……………三二

和歌評釋

その一—その八……………三九

批評と添刪

その一—その六……………四八

解説……………大悟法利雄……………四七

第三卷

歌論・歌話一

牧
水
歌
話

序 文

各々の思想や感情が言語と全然同一のものであるならば是等を表現するに際して何等の困苦をも感ぜない譯であるが悲しいことには言語は如何に發達したとて單なる概念に過ぎないのである。思想や感情そのものがよし如何に微妙であり如何に無量の味を持つてゐるとしても一旦これを言語に由つて表現せむとする時多くは無味乾燥の物と化し易く同時に表現せむとする者に取つて烈しい苦痛が生じて來る。この苦痛を最も切實に感ずるのは詩人殊に短歌人である。よし吾々が思想を表現するに比較的適當なる言語を求め得たとしてもその喜びは事實に於てかの文選職工がアルハベットの一活字を拾ひ得た單なる喜びにすら劣ることが多い。私は今迄自分の歌を見つ一度も満足的笑をもらしたことがなく夫と同時に如何にせば満足なる一首を得ることが出来るかと考へない事はない。表現せむとする内容とそのために使用する言語との是等の關係に就て極めて無神經なる人々を暫く不問に附するとして、吾々は如何にしても我が思想感情をさほど迄に安價に見棄つる度胸もなくまたは是を單なる言語に托して自己を瞞着するを快しとする迄自棄してゐないのである。この場合、表現は即ち技巧であつて又吾々の詩の生命である。かの深山幽谷に隠

遁して感興の生動するがまゝに聲をあげて歌ひ自己の詩が木魂となり遂には忘却の裡に葬らるゝをも意とせぬ様な詩人及び瞬間の詩は例外とする。自己の詩的情緒を各人共通の言語によりて表現し以て永劫に自己の生命を記念せんとする人々にとつては是等の言語を最も適當に驅使して自己と同化せしむる技巧を必要とせなければならぬであらう。斯く考へれば自己の詩歌それ自身を唯一絶對とすると同時に又他の詩人が經驗した藝術上の苦心の痕をたづねて詩歌鑑賞の能力を養ひ自己が表現の參考とするのも敢て自己の生命を汚すものではないと信ずる。

牧水歌話はこの意味に於て讀者に何物かを提供し併せて著者が藝術に對し如何なる態度を持つてゐるかを詳かにするであらう。若し讀了後この書を介して文字以外の或物を讀者の腦裡に留めることが出来るならば著者は夫を以て満足とするであらう。また私がこの出版をすすめた所以の一つは本書を通じて眞個の著者の如何なる人であるかを語りたいからであつた。

明治四十五年二月十日夜

平 賀 春 郊

和歌評釋

ここに引いた二三の人の歌のほかに、もつと評釋して見度い人の歌が澤山ある。また曾て此他に評釋を試みたもので其原稿の見當らぬため止むを得ず除いたものもある。言ひ足りぬ所、禮を缺いた所、或は歌の眞意を誤解して居るものなどの無いとも限らぬ。それらに對しては謹んで謝意を表する。

尾上柴舟氏の歌

尾上柴舟^{おのへさいしゅう}氏の作に對して略^はば一定せる世評といふのは、『哲學的』といふ一語に歸着する様である。哲學的とはどういふ意味であるか、單にそのみでは餘りに漠としてゐる。私も同じく哲學的なる批評を拒避せざる一人として私自身の見地に據^よる解釋を述べて見度い。柴舟氏の作物の價値は晶子^{あきこ}女史の歌の、歌として價値多きが如きと稍や趣きを異^{こと}にしてゐる。この問題を解くことがやがて氏の作の全てを知るよすがにもならうかと思ふ。私が氏の作を尊しとする所以^{ゆゑ}は一に